

地域におけるアートと相互作用に関する勉強会

政策・メディア研究科後期博士課程2年 田島悠史

■概要

2010年4月28日から同年7月31日にかけて、本勉強会を開催した。参加者はSFCの学生だけでなく、他大学（一般大学、美術大学）、一般人（地域関係者）、アーティストなどさまざまなキャリアを持つ人々が集まり、非常に興味深い勉強会となった。

■詳細

本勉強会は昨年度2009年8月20日から同年11月12日にかけて本基金の助成を受け行われた「場所とメディア技術を用いた視覚表現の勉強会」を受け継ぐ形で行われた。そのため、勉強会の体制もほぼ上記勉強会を受け継いでいる。具体的には、『商店街と現代アート—大津中町の試み』[1]などを参照としつつ、「メーリングリストによるディスカッション」により日々の問題提起を発見しつつ、「現実空間での勉強会」を行い、本課題を深めていった。

特に今年度はSFCから離れ、実際に芸術作品が展示されている場所までフィールドワークを行い、勉強会を行った。勉強会の参加者はSFCの学生他、外部からの芸術制作に従事する学生、あるいはプロのアーティストなど13名が集まった。開催場所は岩手県盛岡市、千葉県成田市、群馬県中之条町、同県高崎市、茨城県ひたちなか市などが挙げられる。

特に茨城県ひたちなか市では、私がプロジェクトの一員として深く関わっている「みなとメディアミュージアム2010」[2]の会期直前ということもあり、数回のフィールドワークを行った。5月のフィールドワークでは、2009年度に開催された「みなとメディアミュージアム」の共催団体である「ひたちなか海浜鉄道湊線」「おらが湊鉄道応援団」と共に去年の感想を伺った。



図1、2：5月のフィールドワークの光景

議論の内容は多岐に渡る。2010年に開催されている瀬戸内国際芸術祭[3]が、地域住民と芸術祭関係者間のトラブルがtwitter上で露見される、という事例もあり「地域とアートとの関係」についての議論が多かった。印象深いものとして「アートの展示を制限する諸条件は何か?」「地域の人々が理解し難い芸術は展示されるべきか?」「地域のヴィジュアル性に飲まれてしまうこと」などがあった。私個人の印象としては、地域と芸術を巡る新たなモデルの必要性を強く感じた。



図2、3：展示会場での勉強会光景

■今後の展望

今回の勉強会の成果はまとめるのみならず、2010年7月24日から9月5日に行われる「みなとメディアミュージアム2010」に成果として活かしていく。アートイベントとしては珍しい、量的調査による効果測定を行い、本勉強会の効果を見極めるつもりである。

■謝辞

今回の勉強会は2010年湘南藤沢学会「シンポジウム・研究ネットワークミーティング基金」の支援によって行われた。

■参考文献

[1]アーケードアーツの会 『商店街と現代アート—大津中町の試み』 東方出版

[2]緒方伊久磨、田島悠史、有澤誠 「地域振興手法に対するコンピュータアートの活用」
湘南藤沢学会第7回研究発表大会 2009.11

[3]瀬戸内国際芸術祭 <http://setouchi-artfest.jp/>